

館蔵品展「昔の道具とくらし」出品目録

〔会期:令和8年2月7日(土)～7月5日(日)〕

当館では長く後世に高岡の歴史文化を伝えるために、日頃、郷土の歴史・民俗・伝統産業などに関わるさまざまな資料を収集しています。収集したそれらの資料は調査・整理し、適切に保存・管理して、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では、当館が収蔵する衣・食・住をはじめとした古い生活道具類「民具」に焦点をあて、それぞれの民具がもつ歴史や用途に加え、その時代を生きた人々の暮らしについて展示・紹介します。本展は小学校3年生での社会科の授業単元にあわせた内容にもなっています。

また今回の特集展示コーナーでは「菓子木型」を展示します。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料をご寄贈いただきました皆様、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
1	すげがさ 菅笠		1	径52.0× 高12.5	主に雨具(あまぐ)や日よけに使われた。高岡市福岡地域では、古くから菅(すげ)が栽培(さいばい)され、その菅で笠が生産されてきた。平成21年(2009)には「越中(えっちゅう)福岡の菅笠製作技術」として、国の無形民俗文化財(むけいみんぞくぶんかざい)に指定された	当館 (神保成伍氏)
2	モジリ		1	丈83.0× 桁61.0	女性用の仕事上着(うわぎ)。袖口が細いため、仕事がしやすく、重ね着もできる。「巻袖(まきそで)」とも呼ばれる	当館 (国奥定治氏)
3	もんぺ		1	丈87.0× 腰回74.0	女性の農作業用の野良着(のらぎ)。戦時中からの女性の日常着だった	当館 (国奥定治氏)
4	たけかわぞうり 竹皮草履		2	幅12.0× 奥行22.5	竹の皮を編んだ底の部分に鼻緒(はなお)が付けられた草履。底が半分ほどの長さしかない「足半(あしなか)草履」もある	当館 (富田保夫氏)
5	そでな 袖無し		1	身丈65.0× 身幅43.0	袖がない腰丈(こしたけ)ほどの短い上着(うわぎ)。農作業時や、少し寒い時に作業衣や着物の上に着た。「ドーゲン」とも呼ばれる	当館
6	たらい 盥		1	径60.0× 高22.5	洗濯(せんたく)用の盥。夏はスイカやビールを冷やすのにも使われた	当館
7	せんたくいた 洗濯板		1	幅55.0×奥行 55.0×厚1.6	洗濯盥に湯や水を入れて、洗濯板を立て掛け、衣類を板の凹凸(おうとつ)の溝(みぞ)にこすり合わせて汚れを落とす。女性の大切な嫁入(よめいり)道具の一つでもあった	当館 (五嶋孝一氏)
8	写真「庭(たらい)に盥を出して水遊び」(複写)	昭和47年 (1972)	1	—	盥の中で水遊びをする子供	【昭】
9	写真「盥と洗濯板で揉み洗い」(複写)	昭和30年代 以前	1	—	盥に水を入れ洗濯物を浸(つ)けて、しゃがんで洗濯板を使い、石鹼(せっけん)をこすりつけながら揉み洗いする	【昭】
10	あらいはりいた 洗張板		1	40.6×189.6 ×厚1.7	着物などを洗濯する際には、着物をほどこいて布の状態に戻して洗う。洗い終わった布は糊(のり)付けをし、濡(ぬ)れているうちに洗い張りの板に張りつけて乾(かわ)かす	当館 (日尾清作氏)
11	写真「洗張板で布を乾かす」(複写)	昭和51年 (1976)	1	—	シワにならないように乾かすことができる	【昭】
12	「着物の丸洗いの図」(複写)		1	—	着物を丸洗いする場合の手順を示したもの	【い】
13	カンカン帽 (ぼう)	大正中～ 昭和初期	1	径20.6× 高9.6	麦藁帽子(むぎわらぼうし)。麦藁をプレスして、糊(のり)やニスなどで塗(ぬ)り固めているため、軽くて丈夫(じょうぶ)である	当館 (富田保夫氏)
14	写真「着物姿でカンカン帽(かぶ)を被る男性」(複写)	昭和初年頃	1	—	日本では男性の夏のフォーマルな帽子として広まった。叩(たた)くとカンカンと音がするため、カンカン帽といわれる	【昭】

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
15	わらじ 草鞋		2	幅22.0× 奥行13.0	主に稲藁(いなわら)で編んだ、長時間の歩行に適(てき)した履物(はきもの)。足首に藁紐(わらひも)を巻き付けて固定する	当館
16	おとこものようげた 男物用下駄		2	幅10.7×奥行 23.0×高10.0	雨天(うてん)時や雪道の歩行に履(は)いた。歯は減ったら差し替えることのできる「差歯(さしば)下駄」である	当館 (西田 弘氏)
17	おんなものようたかあしだ 女物用高足駄	昭和40年 (1965)頃 購入	2	幅10.0×奥行 22.5×高11.5	雨天時や雪道の歩行に履いた。爪先(つまさき)に覆(おお)いを付けた「爪掛(つまかけ)」は、保温のためと爪先が濡(ぬ)れるのを防ぐためのもの。「足駄〔高下駄(たかげた)〕」は、差し替えできる底の歯が高く作られている。未使用品	当館 (山田館夫氏)
18	こどもようげ た 子供用下駄		2	幅8.2×奥行 16.9×高9.2	2本歯の子供用差歯(さしば)下駄	当館 (本郷与一郎氏)
19	わらながぐつ 藁長靴		2	幅10.9×奥行 25.0×高34.0	雪の中で履く藁製(わらせい)の長靴。底が草鞋(わらじ)になっていて、取り外しができる。爪先(つまさき)部分が割れており、履いてから縄(なわ)で縛(しば)るため、隙間(すきま)から雪が入らないようになっている	当館
20	ざる 笊		1	幅52.0×奥行 45.0×高21.0	野菜を洗ったり、研(と)ぎあげだ米の水を切る道具。食材などを干(ほ)すのにも使う。高岡では「笊筍(そうけ)」とも呼ばれる	当館 (田中為雄氏)
21	かなもりさへえさく てつびん 金森佐兵衛作《鉄瓶》	江戸末～ 明治期	1	径10.0× 高19.5	湯を沸(わ)かしたり注(そそ)いだりする道具。金屋(かなや)町の鋳物(いもの)職人・金森佐兵衛の作。高岡鉄器(鋳物)の歴史は、高岡開町(1609年)間もなく、前田利長(としなが)が、現高岡市戸出西部金屋(にしづかなや)から7人の鋳物師(いもじ) (鋳造(ちゅうぞう)技術者)を呼び寄せたことに始まると伝わる。金森家もその流れをくむ家系(かけい)で、特に4代佐兵衛(1847～98)は、「金寿堂」を屋号(やごう)として用いた鉄瓶の名手(めいしゅ)であった	当館
22	てつなべ 鉄鍋		1	径30.4× 高17.2	囲炉裏(いろり)や竈(かまど)に掛けて、汁物や煮物などを煮炊(にた)きした。大鍋では大量の里芋やさつま芋などを煮る	当館
23	てつせいはがま 鉄製羽釜		1	径43.0× 高33.0	ご飯を炊(た)く鉄製の釜。竈(かまど)にかけるための鏝(つば)を羽に例えて「羽釜」という。鉄の鍋釜は、高岡開町(1609年)以来の金屋(かなや)町の特産品だった	当館 (筏井晴夫氏)
24	とうせいはがま 陶製釜	昭和14～20 年(1939～ 45)頃	1	径21.8× 高15.0	戦時中の金属代用品(だいやうひん)。戦時中の「金属供出令(きやうしゅつれい)」により、家の中にある金属製品を全て差出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制された	当館 (五嶋孝一氏)
25	写真「竈(かまど)に掛けられた羽 がま じざいゆぎ 釜と自在鉤に下げられた てつびん 鉄瓶」 (複写)	昭和34年 (1959年)頃	1	—	竈(かまど)に羽釜が掛けられ、その隣(となり)に自在鉤に下げられた鉄瓶がある。竈の焚口(たきぐち)の前には火箸(ひばし)がある。写真奥の薪(まき)を燃やしている	【台】
26	アルミ せいはい はがま 製羽釜	昭和20年代 以降	1	径32.0× 高19.7	アルミ製の釜。高岡市街は、戦争で米空軍(べいこうぐん)の空襲(くうしゅう)の被害を免(まぬ)かれた。兵役(へいえき)を終えた鋳物(いもの)業者は銅器生産の設備を利用し、軍需物資(ぐんじゅぶつし)ではなくなったアルミニウムで生活用品(鍋・釜)を大量に生産した。戦後の物資不足で、アルミ製の鍋や釜は多く売れたという	当館
27	でんきがま 電気釜	昭和30年 (1955)	1	径33.3× 高25.3	国産第1号の電気釜(炊飯器(すいはんき))。東芝(とうしば) (発明は協力会社の光伸社)製。主婦の家事労働時間を大幅(おおはば)に減らし、生活様式に大きな変化をもたらした。未使用品	当館 (有澤康夫氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
28	しゃもじ立て しゃもじ ^た 立て		1	径6.3× 高59.7	竹の節 ^(ふし) を用いて筒を連ねたように作ったもの。台所の脇 ^(わき) に掛けておいて、しゃもじ ^(はんがい) や箸 ^(はし) などを挿 ^(さ) しておくのに使われた	当館 (徳田三郎氏)
29	お櫃 ひつ お櫃		1	径31.6× 高23.4	炊 ^(た) きあがったご飯を釜 ^(かま) から移し入れて保存しておくための道具。「飯櫃 ^(めしびつ) 」とも呼ばれる。冠婚葬祭 ^(かんこんそうさい) 用に漆塗 ^(うるしぬり) のものもある。夏は炊いたご飯が腐 ^(くさ) りやすいので木製のお櫃は使用せず、竹製のものに入れておいた。冬は、稲藁 ^(いなわら) で作った蓋付の入れ物にお櫃を入れて保温した	当館
30	ツブラ (飯櫃入れ) めしびつ ツブラ (飯櫃入れ)		1	径48.4× 高29.6	ご飯を入れた飯櫃を中に入れて保温するもの。稲藁 ^(いなわら) などで編んであり、蓋 ^(ふた) や取っ手が付く。冬の寒い時期によく使われた。これと同形で蓋のないものは、乳幼児 ^(にゅうようじ) を入れて育てる「嬰兒籠 ^(えいご) 」として使われた	当館 (竹村昌作氏)
31	はこぜん 箱膳		1	幅31.0×奥行 31.0×高17.0	一人用のご膳。箱の中に茶碗 ^(ちやわん) ・汁椀 ^(しるわん) ・箸 ^(はし) ・皿などを入れておき、食事の時に蓋 ^(ふた) をあおむけて置き、上に茶碗などを並べてご飯を食べる。食後は中へ食器をしまっておく	当館
32	写真「箱膳で食事をする 家族」(複写)	昭和32年 (1957)頃	1	—	各々 ^(おのおの) が箱膳で食事をとる風景	【台】
33	写真「ちゃぶ台を囲む食 卓の図」(複写)		1	—	数人が囲んで食事をする座卓 ^(ざたく) 。昭和戦前から普及 ^(ふきゅう) し始めたが、多くの農家では戦後まで箱膳が使われていたという	【イ】
34	ガラス製醤油差し しょうゆさし ガラス製醤油差し	大正～ 昭和期	2	青：高11.3 ×幅6.4 緑：高11.5 ×幅6.7	醤油を小分けして入れておくためのもの。大正から昭和期にかけては、ガラス製で角型・丸型などをした蓋 ^(ふた) 付の醤油差しがみられるようになり、その多くは大手醤油メーカーなどが宣伝 ^(せんでん) 用に配布したものから始まったとされる	当館 (神保成伍氏)
35	かつおぶしけず 鯉節削り		1	27.2×13.0 ×高9.7	鯉節を削る道具。引き出しのついた箱の上に鉋 ^(かんな) の刃が付いている	当館 (筏井晴夫氏)
36	こんやくつ 蒟蒻突き		1	40.3×10.0 ×高5.9	筒の中に蒟蒻を入れて、突き棒で押し出すことにより、金属製の網目 ^(あみめ) から蒟蒻が細長く切断されて出てくる仕組み	当館
37	ところてん突き ところてん ^つ 突き	平成期	1	37.9×5.4 ×高3.8	心太 ^(ところてん) を細く切る道具。箱型の筒の先に金網 ^(かなあみ) が付いており、筒の中に心太を入れて突き棒で突くと、中から細長く切れた心太が出てくる仕組みである	当館
38	はんごう 飯盒	昭和15年 (1940)	1	幅20.3× 高14.5	炊飯器 ^(すいはんき) を兼ねた弁当箱。当初は軍隊で使われた。中蓋 ^(なかふた) (掛子 ^(かけこ))はおかずを入れるもの。また、中蓋1杯の米に外蓋 ^(そとふた) 1杯の水で丁度良い水加減となる	当館
39	べんとうごうり 弁当行李		2	大：18.0× 12.0×高6.5 小：17.5× 10.0×高5.0	竹で編まれた夏用の弁当箱。ご飯が蒸 ^(む) れないので悪くなりにくい特徴 ^(とくちょう) がある	当館 (中西志さ氏・ 長原政直氏)
40	アルマイト製弁当箱 せいべんとうぼこ アルマイト製弁当箱	昭和後期	2	大：21.1× 16.0×高4.0 小：13.6× 9.7×高2.8	アルマイトは、アルミニウムの表面に酸化被膜 ^(さんかひまく) を作り、錆 ^(さ) びにくく強度を高めた加工。これまでの竹の皮や柳行李 ^(やなぎごうり) に代わる弁当箱として、昭和初期頃より普及 ^(ふきゅう) し始めた	当館 (邑本順亮氏)
41	じざいでしよく 自在手燭		1	幅19.8×奥行 10.1×高13.2	蠟燭 ^(ろうそく) を立てて持ち運ぶ移動用の燭台 ^(しよくだい) 。垂直 ^(すいちよく) に立てて鴨居 ^(かもい) ・長押 ^(なげし) などに引っ掛ける「掛燭 ^(かけしよく) 」にもなる	当館

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
42	いえちようちん 家提灯	昭和期	1	径44.6× 高75.0	中に蠟燭を入れて明かりをとる道具。日の丸の紋(もん)が入っていることから、祭りや行事などに使われたものと思われる	当館 (米森米太郎氏)
43	ありあけあんどん 有明行灯		1	幅26.0×奥行 26.0×高35.0	部屋の照明(しょうめい)道具。持ち運びができる。油の入った皿に、綿糸(めんし)や蘭草(いぐさ)などで作った灯芯(とうしん)を入れて点火(てんか)した。夜明けまで常夜灯(じょうやとう)として使用されたので、「有明行灯」と呼ばれた	当館 (斉藤尚司氏)
44	がんどう 強盗		1	径27.5× 幅42.5	一方向を照らすための手持ち用の灯火具(とうかぐ)。「強盗提灯(ちようちん)」の略。現在の懐中電灯(かいちゅうでんとう)に相当する。中に蠟燭(ろうそく)を立てて使用するが、傾(かたむ)けても蠟燭はまっすぐ立ったままになる	当館
45	かくとう 角灯		1	幅9.2×奥行 9.2×高20.5	室内用照明(しょうめい)器具。持ち歩くこともできる。家の中の移動や近所へ出かける時にも使用した。電灯が普及(ふきゅう)したあとも、停電(ていでん)時や懐中電灯が普及するまで使われた。「カクト」、「シカク」などとも呼ばれる	当館 (泉 治夫氏)
46	カーバイドランプ	大正末～ 昭和初期	1	径14.0× 高28.3	上筒から落ちた水滴が下筒に入ったカーバイド(炭化カルシウム)に反応して発生するアセチレンガスを燃料(ねんりょう)として使用するランプ。火力が強く、燃料の持ち運びがしやすいため、夜店や屋台(やたい)の照明などに広く使われた。製造・富士陶器株式会社	当館 (徳田三郎氏)
47	デルビル ^{じしゃくしきかべかけ} 磁石式壁掛 でんわき 電話機	大正15年 (1926)7月	1	幅19.0×奥行 20.5×高26.4	明治29年(1896)にそれまで使用されていたガワーベル電話機に代わり登場した、日本初の磁石式電話機。前面には2つのベルと送話器(そうわき)が取り付けられており、受話部(じゅわぶ)と送話部が別々になっているのが特徴(とくちょう)である。東京・沖電気株式会社製造。左横の受話器を取って耳に当て、右横にあるハンドルを回し、磁石式発電機により発電して電話交換手(こうかんしゅ)に連絡して通話した。本機は、昭和40年(1965)頃まで使用された。下の電池箱にはル克蘭シエ電池2個が入っている	当館
48	ごう じしゃくしきでんわき 3号M磁石式電話機	昭和20年 (1945)以降	1	幅20.0×奥行 19.2×高10.0	沖電気株式会社(現沖電気工業㈱)製造。昭和8年(1933)に登場した「3号電話機」は自動(ダイヤル)式であったが、当初は局給電(きゅうでん)(交換局からの給電)のない加入電話回線もあったので、これを改善(かいぜん)するために同18年に登場した。上部の受話器を取って耳に当て、右横にあるハンドルを回して電話交換手に連絡して通話した	当館 (小川憲治氏)
49	ごうじしゃくしたくじょうでんわき 3号磁石式卓上電話機	昭和21～24 年(1946～ 49)頃	1	幅15.0×奥行 16.5×高21.5	沖電気株式会社(現沖電気工業㈱)製造。本資料は、なで肩(がた)の「後期型」〔昭和14年(1939)登場〕で、「イ-665磁石式卓上電話機」ともいわれる。上部の受話器を取って耳に当て、右横にあるハンドルを回して電話交換手に連絡して通話した	当館 (小川憲治氏)
50	高岡市電話交換開通記念 絵葉書(複写)	明治40年 (1907) 11月8日	2	—	「交換室」(郵便局内)と「高岡郵便局／高岡市商業会議所」(金沢・高岡の郵便局長と6代木津太郎平高岡商業会議所会頭)が写る	当館

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
51	写真「高岡郵便局内の電 話交換室で電話の取次ぎ を行う女性たち」(複 写)	大正10年代 (1921～26)	1	—	高岡市では明治40年11月5日に電話交換が 開始された(記念式典(しきてん)は8日に高岡 市商業会議所(しょうぎょうかいぎしょ)で開催(かいさい))	高岡市
52	600形A2自動式卓上 電話機	昭和40年代	1	幅14.9×奥行 22.7×高12.9	岩崎通信機株式会社製造。「600形電話 機」は昭和37年(1962)に登場し、それま での4号電話機に代わり一般に広く普及(ふ きゅう)し、「黒電話」といえば本資料とい うイメージを与えた。「A2」はダイヤル の戻るスピードが「A1」より速いモデル である	当館 (中村治郎氏)
53	練炭コンロ	昭和後期	1	径23.4× 高25.6	練炭を中に入れて使用する。風で消える ことなく長時間燃えるため、屋外(おくがい) での煮炊(にた)きや暖(だん)をとる際に用いる	当館
54	海鼠火鉢	明治～ 昭和中期	1	径29.4× 高21.4	海鼠釉(なまこゆう)の濃淡(のうたん)のついた藍色 (あいいろ)で12の面をもつ外側全体が施釉(せゆう) された海鼠火鉢。火鉢とは灰を入れて 炭火をおこし、手足を温めたり、湯を沸 (わか)かしたりする暖房具。海鼠釉の火鉢は その多くが信楽焼(しがらきやき)(滋賀(しが)県 産)であるとされ、古くは明治期より生 産が始まり、高度経済成長期に需要(じゅよう) が減退するまで全国に広く普及(ふきゅう)し たといわれる	当館 (菊田明美氏)
55	「置炬燵の図」(複写)		1	—	炬燵檣(こたつやぐら)と呼ばれる木枠(きわく)の中心 に、行火(あんか)または掘(ほ)り炬燵を置 き、上から炬燵布団(こたつぶとん)をかけて使 われた	【イ】
56	炬燵檣		1	幅50.5×奥行 50.5×高37.5	中に炭火を入れた行火などを置き、布団 の中で足を温めた	当館 (金刺亀太郎氏)
57	ねこごたつ(行火)		1	幅×奥行×高 各25.0	中に炭火を入れて手足を温める道具。こ れを覆(おお)うように檣(やぐら)をのせ、その 上に布団(ふとん)をかぶせて暖(だん)をとつ た。布団をかけると猫が寝ている形に似 ているため、「ねこごたつ」と呼ばれる	当館 (江渕安太郎氏)
58	炭取り	明治期	1	径24.5× 高32.3	炬燵(こたつ)や火鉢(ひばち)に使う炭を、炭俵(すみ だわら)から小出しにして持ち運んだり、入 れておくためのもの。竹製	当館 (藤井喜代乃氏)
59	ブリキ製湯たんぽ	大正～ 昭和初期	1	幅32.0×奥行 24.0×高9.0	身体を温めるために湯を入れて寝床(ねどこ) で使う道具。湯が冷めないように、注水 口(ちゅうすいこう)をできるだけ小さく作り、栓 (せん)をして使う	当館 (織田睦夫氏)
60	陶製湯たんぽ	昭和戦中	1	幅22.9×奥行 15.2×高9.4	中に湯を入れて、手足や体を温めるため の道具。やけどしないように布に巻い て、布団(ふとん)の中に入れて使った。「国 策湯丹保(こくさくゆたんぽ)」とあり、戦時中の 金属代用品(だいやうひん)である	当館
61	豆炭アンカ	昭和40～50 年(1965～ 75)頃	1	幅19.0×奥行 15.5×高10.0	布団などの中に入れて手足を温める保温 器。豆炭(無煙炭(むえんたん)と木炭(もくたん)の 粉を混ぜて固めた卵型の固形燃料(ねんりょ う))を中に入れて使用する。商品名「品 川(しながわ)アンカ」。未使用品	当館
62	鍍		1	幅4.5× 高37.8	炭火などの中にコテ部を差し込んで熱し たものを、着物などの縫(ぬい)目に当て、 縫った部分を伸ばしたり、折り目をつけ たりする道具。「焼きごて」ともいわれ る	当館
63	火のし		1	径11.7×長 37.7×高5.4	底の滑(なめ)らかな金属製の鍋(なべ)の中に炭 火を入れ、その熱を利用して底を布に当 ててシワをのばすための道具	当館 (吉野作治氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
64	すみび 炭火アイロン		1	幅21.0×奥行 10.6×高19.7	アイロンの本体に火の付いた炭を入れ、その熱で布のシワを伸ばした。上部には、煙(けむり)を逃がし、空気を取り込むための煙突(えんとつ)が付いている	当館
65	ナショナル スーパーアイロン	昭和2年 (1927) 発売	1	幅17.5×奥行 14.6×高11.9	松下電器製作所(現パナソニック株)が発売した電気アイロン。電気アイロンは、明治33年(1900)頃に登場し、各家庭に普及(ふきゅう)し始めたのは大正6年(1917)頃であるとされる	当館
66	ふみぐるま 踏車		1	幅158.0×奥行 37.0×高93.5	羽の部分に人が乗って踏むことにより、水位の低い堀(ほり)から高い田へ水を上げることができる道具	当館
67	写真「踏車による田への水入れ」(複写)	大正～昭和初期	1	—	高岡古城公園池の端(いけのはた)	高岡市
68	せいた 背板		1	幅47.0× 奥行77.0	荷物を担(かつ)ぐために背負(せお)う運搬(うんぱん)道具。稲(いね)や薪(まき/たきぎ)など、量の多い物を運ぶのに便利	当館 (堺喜十郎氏)
69	にぼう せいたよう 荷棒 (背板用)		1	長71.5	疲れたときなど、荷物を背負ったまま荷棒を背板の下に置いて支えて休むことができる	当館 (堺喜十郎氏)
70	写真絵葉書「背板で馬屋 ごえ 肥を運ぶ女性たち」(複 写)	昭和8～19 年(1933～ 44)頃発行	1	—	馬屋肥とは、家畜(かちく)の糞尿(ふんにょう)や敷き藁(しきわら)などを腐らせて作る肥料(ひりょう)のことで、農作物の成長によく効いたという。庄川(富山県西部)の近辺の農村にて	当館
71	か し き が た 菓子木型	大正～昭和 前期	48	—	落雁(らくがん)などの菓子を製作するための木型など。花や葉、鳥、吉祥(きつしょう)文様(もんよう)など様々な形の木型がみられる	当館 (吉田恒治氏)

※所蔵先の写真の出典は、【台】『台所用具の近代史』(有斐閣, 1997年)、【イ】『イラストで見るモノのうつりかわり 日本の生活道具百科』(河出書房新社, 1998年)、【昭】『昭和のくらし博物館』(河出書房新社, 2000年)、【い】『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』(柏書房, 2004年)を示します。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・図・複数資料の寸法は割愛しました。

計 71件128点

(公財) 高岡市民文化振興事業団 高岡市立博物館 (富山県高岡市古城1番5号)
TEL:0766-20-1572 FAX:0766-20-1570 <https://www.e-tmm.info/>